

2018年7月5日

## 資料室だより 110

今まで当資料室に1冊もなかったシャルル・トゥルヌミールのオルガン作品の楽譜を2冊購入しました。今後、少しずつ増やしていきたいと思いますのでここにご紹介します。

### **Tournemire, Charles(1870-1939; L'Orgue Mystique, op 55 –Cycle de Noël– Livre 1: Dominica III Adventus/ Livre 2: Immaculata conceptio B.Maria Virginis**

セザール・フランクからオリヴィエ・メシアンにいたるフランスの100年ほどのオルガン音楽史を概観するとそこに流れているのは深いカトリシズムの伝統、すなわちグレゴリオ聖歌の霊性です。これを抜きにして語ることはできません。1000年を超える典礼音楽の遺産がオルガン音楽作曲家のなかに血液のように流れ、作品の命を活かし、新たな生命を得ています。グレゴリオ聖歌のフランス的伝統、ということのみならず「カトリック教会音楽史」という一つの線に貫かれている印象を私は持ちます。

例えば巨匠メシアンと同様にトゥルヌミールも最晩年にアッシジの聖フランシスコを題材とするオペラを残しています。トゥルヌミール最後の作品となったのは“*Il poverello di Assisi, op 73*” (アッシジの貧者)です。長く忘れ去られていた13世紀の聖人フランシスコの再評価がポール・サバティエによって始まったまさにその時代に音楽家として生きていた彼がカトリシズムの神髄といってもよいアッシジの聖フランシスコを音楽化しようとしていたことは注目に値します。また1916年にはオーケストラを伴う合唱曲 *St François d'Assise op 52*(アッシジの聖フランシスコ)を作曲しています。両曲とも未出版なので、認知度は低いのですが、こういった志向が57歳から着手された典礼音楽作品 *L'Orgue Mystique* に結晶されているのではないのでしょうか。この時期は折りしもグレゴリオ聖歌の復興促進の時期に一致します。カトリックの1年の典礼暦に従い253曲という途方もない量のモニュメンタルな作品に取り組んだ彼はグレゴリオ聖歌と典礼との一致をオルガン演奏に求めます。覆われた神秘を露わにするのがオルガンの役目であり、その意味で *L'Orgue Mystique* であると思います。

さて、彼は待降節第三主日からこの書をはじめます。つまり *Gaudete* といわれる日です。そして続くのは時系列的には前後しますが、「無原罪の MARIA」となります。いずれも前奏にはその日のグレゴリオ聖歌の入祭唱がパラフレーズされています。待降節第三主日は *Gaudete in Domino*、無原罪の MARIA の日は *Gaudens gaudebo* です。オルガン独奏が自由に入りうる箇所として1.前奏(入祭前の前奏)、2.奉納、3.聖体奉挙、4.聖体拝領、5.終曲(退堂)の5つのセクションがセットになって51巻まであります。このなかには300曲以上のグレゴリオ聖歌が引用されているといわれます(1つの曲に複数の聖歌旋律の断片が入ることもあり)。グレゴリオ聖歌の旋律とその旋法性によるファンタジーの展開、シンプルなものと同時に複雑なテクスチャになっていく様相を是非研究してみてください。

(杉本ゆり 記)